

# 閉ざされた扉

私の身には人生最悪の厄災がいくつも降りかかった、アデラ・デ・レンヒフォはしばしばそう愚痴をこぼしていた。二十五歳にして夫に先立たれ、貧しいゆえに必死で働いて品位ある生活を保たねばならず、おまけに息子は病弱、いや、正確に言えば、普通の子供のゆうに二倍は眠るひ弱な子供だった。

実際、生まれてこのかたセバスティアンは、一日の大半を寝て過ごしている。母が丹精込めて刺繍した枕に頭を埋めて目をつぶるや否や、瞬時に彼は天使のように安らかな眠りに落ちた。

「本当に静かないいい子で」事務所の同僚たちにアデラは話していた。「他の子と違って、夜に目を覚まして泣いたりしないのよ」

アデラとセバステイアンは、じめじめした薄暗い下宿屋の二階二間に住んでおり、窓が小さな中庭の側にしかないとはいえ、居心地は悪くなかった。朝、アデラが仕事に出ると、セバステイアンの面倒を見るのは家主のメチータ夫人だったが、他の五歳児と違って、あちこち動き回ったり騒ぎを起したりして迷惑をかけることのない落ち着いた子供だったので、まったく手はかからなかった。メチータ夫人が朝の家事を始めると、セバステイアンはいそいそと自分の部屋へ引き下がってベッドで横になり、両脚を広げて眠りこけた。この歳の子供がずっと寝たきりで、何か他のこと、どう言えばいいのか、もっと普通のことをして遊ぼうとしないのは、《なんとも妙な》ことで、メチータ夫人は気になって仕方がなかった。ある日の午後、彼女は、この子の奇妙な性格についてさりげなくアデラに訊いてみようと思ひ立ち、いつも鉤針編みの上でせかせか動かすそばかすだらけの指から目を離すことなく問いを向けた。

「あなたの子はびっくりするぐらい本当によく寝るわね！ 大丈夫なの？」

アデラは体を強張らせて答えた。

「寝たいから寝ているだけなのに、何か悪いかしら？」

「別にそんなことはないけど……」メチータ夫人は答えたが、マスチフ犬のように顎を引き締めてその場を離れた時には、若い寡婦は神経過敏だから今後二度とこの家には受け入れるまいと内心考えていた。

メチータ夫人の指摘でかねてからの不安を突きつけられ、アデラは改めて事実を直視せざるをえなかった。確かにセバステイアンは寝過ぎだった。一日中ぼんやり眠そうにしていると、そういうことはないが、単に寝たいからというだけで、まるで楽しい趣味にでも耽るように、銅の格子の小さなベッドで横になったり、椅子に腰を下ろしたり、とにかく突然眠り始める。母としては、不安を覚えた様子を見に行くこともあるが、その姿を見るかぎり、瞼の後ろにどんな魅惑の光景が広がっているのか、息子の表情はいつもいつも恍惚としていて、少し安心する。

セバステイアンが他の子たちと違うことは明らかで、平静を装ってはいても、アデラの心は落ち着かなかつた。愛想のない孤独な子供で、人、物、寒さ、暑さ、その他、周囲にまったく関心がなく、玄関の採光窓に溜まった埃を濡らす冬のしつこい雨に目をやることもない。月と同じように片側だけしか世間に顔見せしようとせず、怖いくらいだった。他の下宿人たちはセバステイアンに優しく接してくれるが、それは、不幸な境遇にあるとはいえ、アデラが立派な夫人だからで、彼女の顔を立てているにすぎない。身にしみて感じられたとおり、誰も本気でセバステイアンをかわいがってはおらず、それが理由のないことではないだけに、いっそう胸が張り裂けるような思いがした。五歳児がずっと寝てばかりで、他のことをしがない、これは異常としか言いがたい。疲れや眠気でうっかり居眠りをしてしまうのではなく、ちゃんと時間を選んで、他の子供たちがビー玉で遊んだり歌を歌ったりするのと同じで、寝ようと思つて寝ているのだ。同じ年頃の子供に興味を示さないし、本にも雑

誌にも映画にも飽きてしまふし、そもそも遊びたがりさえしない。すべてを投げ出してベッドに身を投げて寝る、それ以外に望みは何もないようだった。

ある日アデラは、息子に向かって問いかけた。

「ねえ、どんな夢を見るの？」

「夢？」

「そう、寝ている時には、人とか物とか、何か見るでしょう？」

セバステイアンは母の手を撫でながら答えた。

「ううん…… 何も見ないと思うよ。覚えてないや……」

アデラはこの答えに苛立ちを覚え、刺々しい問いを向けた。

「それなら、何の得にもならないのに、なぜずっと寝ているの？」

「寝たいからだよ、ママ……」

これを聞いてアデラは本当に腹が立った。自分はこれほど身を粉にして働きながら息子を養っている。若くて、外見だってまだ捨てたものではないのに、息子を思うばかりに、事務所で言い寄ってくる男たちをいちいち袖にしている…… この子…… この子…… この子…… この子…… いろいろなものを諦め、いろいろな苦痛に耐えているというのに、この子はただ寝たいというだけでずっと寝ている。小さい頃からずっとしたいことしかしないセバステイアンのことが嘆かわしく、その振る舞い

が不道徳とすら言えるほど危険に思われてきた。確かに最初は、息子が眠る姿を見て、そこに何か宝物のようなものが隠れているのではないか、今は母にも息子にもわからなくとも、やがて何かの役に立つ重要なことが潜んでいるのではないか、そんな神秘的な予感がぼんやり漂っていて、淡い期待にすがって不安を押し殺すこともできた。だが、蓋を開けてみれば、単に好きで寝ているだけだというのだから、こんな愚かしい話はない！ 自分だってやりたいことはいっぱいあるし、その気になればできたこともたくさんあるというのに！

「わかったよ、ママ」母の不機嫌に怯えてセバステイアンは言った。「それなら、これからは夜しか寝ないよ……」

アデラの心臓が井戸の深みに落ちそうになって、突如止まった。一瞬だけ黙った後、彼女はようやく小声でゆっくりと問いを発することができた。

「つまり、寝たいから寝ているだけで、その気になれば寝ないでいられるというの？」

「そうだよ、ママ、僕は寝たい時に寝ているだけだよ……」

奇妙に寂しげな姿で目の前に立った息子は、親にも子にも理解できない何かを集中させたまま、哀れな青い目に一途な思いを込めてじっと母親を見つめていた。内側から込み上げてくる愛を感じた彼女は、思い余って息子を抱き締め、キスして、しっかりと自分の体のほうへ引き寄せた。

「いいわ、そんなことしなくて」彼女は言った。「好きなだけ寝なさい。」